瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 15
瑪瑙集 …… 27
紅玉集 …… 29
11月号月評 …… 30
恵贈句集拝見（52） …… 32
恵贈俳誌拝見（22） …… 34
特別作品「岸和田だんじり祭」 …… 36
特別作品「アイガー・マッターホルン」 …… 38
他誌転載 …… 40
琥珀集作品鑑賞 …… 42
瑠璃集作品鑑賞 …… 43
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 45
俳誌交歓 …… 47
句集「故郷」共鳴句Ⅲ …… 48
句集「九十九島」共鳴句Ⅰ …… 50
妣の国父の蒼天（44） …… 52
瑗本部句会報 …… 54
エッセイ「葉見ず花見ず」 …… 56

2012/11　第80号

今月の一句

白樺の雫あはれになめこ売　桂樟蹊子

（昭和四十二年作）

裏磐梯の檜原湖畔の句である。道端で、なめこ茸を板の上に並べて売っている子供を見かけられた。白樺の霧雫が時々落ちて、板をうち、落葉を打っていたという詩情の深い句である。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

うろこ雲

塩路隆子

たそがれの光を載せて椋鳥の群

蕎麦の花抱擁解かぬ道祖神

芋の葉にころがる露の銀メダル

全身を見せず大魚のうろこ雲

颱風の目にゐて含む塩の飴

新涼や画中をんなの水遊び

正座する暮し遠退く夜の永き

PDF= 俳誌の salon

十一月号光耀抄

塩路　隆子選

整然と太古の地層小鳥来る　片岡久美子
ジャズ低く流す飯屋のにごり酒　辻　知代子
礎石野の石の湿りやちちろ虫　伊藤　純子
石投げて月笑はせる湖畔道　橋本　靖子
金平糖一つふくめば蘭の秋　和田森早苗
秋めくや小倉の山の風ふけば　伊東　和子
里山の「葉見ず」「花見ず」彼岸花　宮崎左智子
塩田の男の寡黙汗しぶき　中井登喜子
一串の芋田楽に故郷自慢　伊藤　憲子
秋潮に原発白き巨塔かな　竹内　悦子
「出ぼけ」てふ峡の労役冷麦茶　松岡　和子
夕涼の交信相手湖の風　前川ユキ子
米どころ銘「潟舟」の新走り　田下　宮子
遠目にも千日詣幟立つ　粟倉　昌子
着流しの案山子カップル雀寄る　辻　香秀
砂鳴くや琴引浜の秋あかね　中川すみ子
工具買ひパパと宿題夏休　増田　一代

PDF= 俳誌の salon

雷鳴に猫パニックの爪の痕　宮田　香
蜥蜴追ふ腕白坊や耀く目　三川美代子
押入れに宝物ある敬老日　森下　康子
携帯に身罷りし報夏の果　山口キミコ
旅立ちの飛翔訓練秋つばめ　山本　丈夫
をんな同士に通ずる話鰯雲　和田　郁子
あかね色秋の夕焼に音のなき　池田加寿子
杖持たぬ老の美学や敬老日　石川かおり
太陽を背負ふ心地やこの残暑　大島みよし
寂しきはひとりの夕餉冬瓜汁　大松　一枝
虚無僧の尺八聞きつ月見酒　笠井　清佑
入相に遠蜩の絡みけり　北尾　章郎
秋の夜や読み継ぐ頁繰れる音　西郷　慶子
秋出水山椒魚は岩を這ひ　坂根　宏子
陶枕や李白と酌みし夢言はず　阪本　哲弘
はんざきに噛まれし村の噂かな　塩路　五郎
千年杉のパワーに縋る秋の蝉　鈴木　照子
あれこれのセピア色なり終戦忌　笹井　康夫
芋殻折る空しき音や子ら去りて　杉本　綾
月明り窓に庭木のシルエット　小林　久子

PDF= 俳誌の salon

舟着場龍舌蘭がお出迎へ　土井くみ子
返答に詰まりて畳む秋扇　山田　愛子
無花果やテロの恐怖の去らぬ国　坂上　香菜
秋澄むや海を遠見のハーブティー　藤見佳楠子
大蘇鉄色なき風を梳けるかに　中村ふく子
空蝉のがらんどうなる未練かな　国包　澄子
開け放つ生家や秋の葭障子　井口　淳子
秋めくや取り箸青き普茶料理　田中　浅子
お花畑豆粒ほどの竹生島　吉田　宏之
薪焼べる初体験の夏休　長濱　順子
秋の蚊帳唱歌かすかに小諸宿　山内　節子
ふり返る道は日の中紅芙蓉　谷口　俊郎
これやこの天下の険や雲の峰　桂　敦子
水底にひかるコインや秋の宮　落合　晃
夜明け前金星連れて細き月　山崎　真義
広告の売れずの空地ちちろ鳴く　高谷　栄一
闇空へ亡き人祈る五山の火　高屋喜美子
野の花を活けて素朴な花展かな　竹内喜代子
鵜が囲む舟筏の灯川に揺れ　津田　富司
登高や婚約したること思ふ　常田　創

PDF= 俳誌の salon

現世に戻りきれざる昼寝覚　中本　吉信
中庭に帰り支度の群燕　難波　篤直
改札を出れば秋風湖の駅　西岡　裕子
夏休ボクとママとの畑日記　西垣　順子
宿坊の眠れぬ夜や虫の秋　西田　史郎
宿坊の朱膳の小鉢芋茎和　西村　敏子
たじろがぬ猛暑の中の仁王門　能勢　栄子
進展なき拉致問題や猛暑果て　秦　和子
近江野にはや動き出す田刈かな　藤本　秀機
熊注意に怖気付く朝そぞろ寒　福本すみ子
岩壁に朽ちしレリーフ山すすき　松田　洋子
酒米の守りの神や案山子んぼ　松田　和子
津波跡一面覆ふ草の絮　山崎　里美
飴色に傾ぎて懸る秋簾　山本　孝夫
疏水べり萩ひと叢の風情かな　横田　矩子
のべつ幕なしに風吹く稲田かな　吉田　希望
突発のゲリラ雷雨に呪文言ふ　飯田美千子
七つ八つ大音声のはたた神　板倉　安正
横を向く南蛮煙管小粋とも　伊藤　和子

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

秋　暑

片岡久美子

整然と太古の地層小鳥来る
新涼の奇巌に涛の騒ぎけり
洞窟は燕の塒秋の潮
砂山の酪駝客待つ秋暑かな
秋暑し暖簾さながら烏賊を干す
川音の高き八月夢千代碑
せせらぎの灯影涼しや峡の宿

秋　袷

辻　知代子

ジャズ低く流す飯屋のにごり酒
虫鳴ける夜半の目覚めや不眠症
桔梗の白砂まぶしき源氏庭
吹き通る風に桔梗の静ごころ
鱧子（からすみ）の味見の罠にはまりけり
連れ立ちて川辺に躍る石だたき
子に馴染む亡父紬の秋袷

秋　蝉

伊藤　純子

秋蝉の声の響交ふ切通し
三山のひとつを登り涼新た
礎石野の石の湿りやちちろ虫
寺跡に棄て鬼瓦秋日濃し
百均の傘吹き飛ばす初嵐
産土の茶会和やか薄紅葉
糠床の気嫌の悪き秋暑かな

PDF= 俳誌の salon

稲つるみ　橋本　靖子

吾亦紅をんな三役こなしけり
卓袱台は今死語となり零余子飯
稲つるみ生駒稜線浮き上る
人生のいまを旬とし秋うらら
癌友にポジティブな夫梨が好き
秋篠へ続く佐保路や彼岸花
石投げて月笑はせる湖畔道

秋茄子　和田森早苗

走馬燈子は大の字の夢ん中
口答して上向くや唐辛子
影少し長くなりたる秋日傘
金平糖一つふくめば蘭の秋
待ち人や静かに遣ふ秋扇
炭斗（すみとり）となれる瓢の育ちけり
元気印の姑捥ぎくれし秋茄子

嵯峨野　伊東　和子

秋めくや小倉の山の風吹けば（百人一首編纂地）
都恋ふて祇王の散らす竹落葉
野の宮を嵯峨のはじめに竹の春
新涼や黒木鳥居の注連あらた
夏空へジャンプジャンプのイルカショー
山椒魚岩のいろしてみじろがず
海豹の旋回妙技涼しかり

鰯　雲　宮崎左智子

手花火にしやがむ影あり裏通り
鰯雲洗ひざらしのシヤツ馴染み
冬瓜の喉に程よき風呂上り
風変り六根清浄走りそば
どの尻もあげて秋茄子なり終ひ
ハイヒール音の快活今朝の秋
里山の「葉見ず」「花見ず」彼岸花

PDF= 俳誌の salon

能登の旅

中井登喜子

里山の案山子井戸端会議して
塩田の男の寡黙汗しぶき
舞怪し御陣乗太鼓の髪乱れ
断崖の宿へ波音大夕焼
こほろぎや四百年の梁に鳴き
青芒大陸臨む能登の果
ひぐらしの声かやぶきに消え入りぬ

故郷自慢

伊藤　憲子

砂遊び夕ひぐらしの鳴きはじめ
洗濯の渦に団栗見え隠れ
一串の芋田楽に故郷(くに)自慢
新米を今も積まれて年貢蔵
刺子さす媼の指へ秋の蝶
美貌には美貌の悩み秋桜
夏牡蠣に悪戦苦闘夕厨

秋の湖

竹内　悦子

浪少し荒くなりけり秋の湖
秋旱琵琶湖の水位ひた下がり
秋潮に原発白き巨塔かな（美浜）
胃カメラを呑みてへろへろ残暑なほ
小鳥来る自然歩道の山越えて
茄子料理親から子へと受け継がれ
防災日水と缶詰確保して

花おくら

松岡　和子

背泳ぎで海坂の孤を確かめる
朝蜩夜はつく法師峡ひと日
つましくも厨豊かに花おくら
緑蔭は大道芸の舞台裏
「出ぼけ」てふ峡の労役冷麦茶
もろこしの大束小束太梁に
再稼働と越のくらげを憂ひけり

PDF= 俳誌の salon

秋の風

前川ユキ子

対岸に個々の煌めき秋灯
シャガールのTシャツ闊歩秋の風
深呼吸体内巡る秋の風
夕涼の交信相手湖の風
川風の丁字路に出て虫の秋
秋高し耀く雲の品評会
秋意かな海にとけゆく没日燦

吾亦紅

田下　宮子

萩散るは伎芸天への散華とも
色を増す秋篠寺の紅の萩
米どころ銘「潟舟（かたふね）」の新走
露草や出雲阿国の塚寂びて
苦瓜（ゴーヤー）の終焉赤く染まりけり
吾亦紅活けて商ふ和装店
宍道湖を窓に鱸の奉書焼

清水寺

粟倉　昌子

遠目にも千日詣幟立つ
一年坂大桶に立つ花氷
風鈴に風筋よろし三年坂
長柄杓を叩き溢るる音羽滝
舞台より見慣れたる京夜の秋
夜の秋や鐘と読経の東山
仄明り観音菩薩さやけしや

避暑地

辻　香秀

不揃の茄子のひと山ワンコイン
着流しの案山子カップル雀寄る
秋声に体感温度二度下る
ひとときを血色で染める夕焼雲
バス停のベンチに日蔭銀杏樹々
避暑地での恋の冒険遠ざかり
赤とんぼ鬼押出に乱れ舞ふ

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

苧殻折る　杉本　綾

打水の水をふまずに通りけり
風鈴や師の句を吊し風を待つ
今朝の蝉東南の森震はせて
廊走る音の気配や帰省の子
苧殻折る空しき音や子ら去りて

月明り　小林　久子

少年の凛々しきまでの日焼かな
熱中症の気づかひメール交はしをり
月明り窓に庭木のシルエット
癒やさるる唱歌の世界里は秋
品格と華美を競うて菊花展

手花火　土井くみ子

向日葵やもう疲れたと下を向く
夏祭欲無き吾子が大当り
大江戸の地ビールごくり川下り　（墨田川水上バス）
船着場竜舌蘭がお出迎へ
手花火を持つと地団駄一歳児

秋扇　山田　愛子

返答に詰まりて畳む秋扇
忘れ物して来たやうな夏の果
一片の氷入れやる猫の水
秋草の色の淋しき盆灯籠
ガラス器を磨き今年の夏送る

無花果　坂上　香菜

無花果やテロの恐怖の去らぬ国
美容師と地震の話防災日
秋澄めり耳を刺したる超音波
「カイゼン」は世界の言葉天高し　（カイゼン＝改善）
齢なみのスローライフを爽やかに

PDF= 俳誌の salon

紅玉集

どいここの（五才）

おねえちゃんかきこうしゅうにいっちゃった
パイナップルジュースはあまりきにいらない
ドラえもんにあいにいったよなつやすみ　（藤子Fミュージアム）

森下　千聖（小二）

キャンプの夜星がいっぱいキラキラと
スカイツリー町はおもちゃだ夏の昼
かきごおり一ぱいたいらげまん足だ

土井ほのか（小四）

夏休み船から見えたスカイツリー
海水浴弁当いっぱい食べました
ドラえもんの冷たいココアおいしくて　（藤子Fミュージアム）

廣瀬　将也（小四）

はじけたぞイガの中からくり三個
赤とんぼふわふわ飛ぶよいねの上
秋の夜鳴き声変わる虫の声
セミの声聞こえなくなり秋ちかし

塩路　彩奈（小五）

日焼けしたみんなが集まる運動場
夏休みだしまきたまご作ったよ
奏ちゃんおっぱいの後汗いっぱい
栗食べるめがねの奥の優しい目
コロッケを揚げるおでこに汗いっぱい

塩路　遼（中一）

眠るとき虫の声聞く子守唄
サッカークラブ午前も午後も炎天下
「たくましくなったね」と母休暇明
ＵＳＪ冷したお茶が命綱
涼しいなジェットコースターに風が飛ぶ

PDF= 俳誌の salon

十一月号月評

塩路　隆子

猛暑に体調を崩された方もあったようだが、まずまず落ち着いた気候に、皆様も体調を元に戻された様子で、今月は殊に良い句が出揃った感じである。しかも光耀集を選び、月評を書くのに新しい人達に目立ったいい句を見つけ、楽しい思いをさせて頂いた。素晴らしい句の鑑賞や月評をさせていただく。

整然と太古の地層小鳥来る　片岡久美子

詳しい事は解らないが地球の歴史を知る際に重要な役目を持つようである。地層の分け方には時間によるもの、生成環境によるものとがあるようだが、作者の訪れたのは、太古に形成された何億年前の地層から比較的新しい地層が何かの現象により断層となり、新旧両世代の断層を目前にされたときの感動であろう。整然と表れた悠久の地層科学の不思議に熱中されているとき、小さい命をもった小鳥がやって来ていたという二つを対象された手腕に大きく感動した。立派な作品である。最近力を付けて来られた作者に拍手を送りたい。

ジャズ低く流す飯屋のにごり酒　辻　知代子

「ジャズ」と「飯屋のにごり酒」のアンバランスの中に調和のあるこの取り合わせが面白い句に仕上がっている。１９５０年頃のジャズであろうと仮定してみよう。その頃のジャズでは、江利チエミ・柳沢真一・笈田敏夫・ペギー葉山などが印象にのこる。この飯屋の主もその時代のものがお気に入りなのかもしれない。当時のジャズに憧れ、それらを聴きながらにごり酒を楽しみながら飯屋に集まり酔いしれる人たち、低く流すから余計に耳を傾けているのであろう。筆者にはそのような飯屋の風景が浮かぶのであるが…。郷愁の匂ういい作品である。

礎石野の石の湿りやちちろ虫　伊藤　純子

礎石の幾つかが叢に残された寺跡であろうか。大和にはよくこういった場面に出くわすことがあるが、中七の置き方が素晴らしい句に仕上げている。まさに露凛凛の秋の気配が、露を言わずに「石の湿り」で伝えている巧みさに惹かれた。「ちちろ虫」を配することにより、更に周囲の静けさが浮かび、情緒の深い句に仕上がっている。穏やかでいつも静かな句風を身に付けられた作者の努力の結晶の句と言えるであろう。今後を期待の作品。

PDF= 俳誌の salon

猛暑に体調を崩された方もあったようだが、まずまず落ち着いた気候に、皆様も体調を元に戻された様子で、今月は殊に良い句が出揃った感じである。しかも光耀集を選び、月評を書くのに新しい人達に目立ったいい句を見つけ、楽しい思いをさせて頂いた。素晴らしい句の鑑賞や月評をさせていただく。

整然と太古の地層小鳥来る　　片岡久美子

詳しい事は解らないが地球の歴史を知る際に重要な役目を持つようである。地層の分け方には時間によるもの、生成環境によるものとがあるようだが、作者の訪れたのは、太古に形成された何億年前の地層から比較的新しい地層が何かの現象により断層となり、新旧両世代の断層を目前にされたときの感動であろう。整然と表れた悠久の地層科学の不思議に熱中されているとき、小さい命をもった小鳥がやって来ていたという二つを対象された手腕に大きく感動した。立派な作品である。最近力を付けて来られた作者に拍手を送りたい。

ジャズ低く流す飯屋のにごり酒　　辻　知代子

「ジャズ」と「飯屋のにごり酒」のアンバランスの中に調和のあるこの取り合わせが面白い句に仕上がっている。１９５０年頃のジャズであろうと仮定してみよう。その頃のジャズでは、江利チエミ・柳沢真一・笈田敏夫・ペギー葉山などが印象にのこる。この飯屋の主もその時代のものがお気に入りなのかもしれない。当時のジャズに憧れ、それらを聴きながらにごり酒を楽しみながら飯屋に集まり酔いしれる人たち、低く流すから余計に耳を傾けているのであろう。筆者にはそのような飯屋の風景が浮かぶのであるが…。郷愁の匂ういい作品である。

礎石野の石の湿りやちちろ虫　　伊藤　純子

礎石の幾つかが叢に残された寺跡であろうか。大和にはよくこういった場面に出くわすことがあるが、中七の置き方が素晴らしい句に仕上げている。まさに露凛凛の秋の気配が、露を言わずに「石の湿り」で伝えている巧みさに惹かれた。「ちちろ虫」を配することにより、更に周囲の静けさが浮かび、情緒の深い句に仕上がっている。穏やかでいつも静かな句風を身に付けられた作者の努力の結晶の句と言えるであろう。今後を期待の作品。

PDF= 俳誌の salon